



— おんもの「御物作り」に関するイベントのご報告 —

さくほ集落の話の聴き手事業では、12月7日に御物作りに関する思い出をお話いただく【「御物作り」について語る会】と、1月12日に実際に作っていただく【「御物作り」体験会】の2つのイベントを行いました。今月号ではその時の様子をご報告します。

そもそも「御物作り」とは、このあたりの地域で小正月（1月15日）に行われていた年中行事です。集落によって詳細は異なりましたが、仕事始めで新年初めて山に入る初山の時に採ってきたノリデッポウ（ヌルデ）で、俵や刀などを作り、神棚に奉納して五穀豊穰を願いました。

語る会には11名が集まり、それぞれの思い出や、知っていることを共有していました。実際に色々な地域や年代の方にお話を伺って分かったのは、御物作りで作るものは家や人によって異なっていたということ。また、そもそも行事が残っているかどうか差があるということでした。実際に作っていた方、存在自体知らなかった方、どちらもありました。また、御物作りと同じ日に行っていた、まるめ年やまゆだま繭玉作りについては知っている方も多く、思い出話に花が咲きました。



「御物作り」について語る会の様子

体験会には18名が集まり、実際に御物を作ってみました。参加者のうち経験者は1人だけでしたが、「佐口民俗誌稿」という書物を参考に見本を作ってくださいました方もいて、俵、刀、おんべ、鋤、すき、小槌、ケエカキボウ（かゆかきぼう）と7種類もの御物が出来上がりました。その後、茂来館に展示させて頂きました。3月5日まで展示しています。



最初は「分からないから知りたい」という思いから始まった御物作りを中心とした「やらなくなった行事」をテーマにした活動。色々な方に昔の話を伺っていく中で、それらを記録として残したかったけど残せなかった。佐久穂を離れて気づいたという方と出会いました。その想いをきっかけに、このような企画が生まれました。

おかげさまで、地域に昔あった行事をテーマに、地区や世代を超えて協力し合い実現することができました。不思議なご縁で繋がって開催することができたこの会。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。（文責 永井）

完成した御物。左から鋤、すき、小槌、刀、俵、おんべ、ケエカキボウ



神事のため、縄は右ではなく左巻きに縛う



俵に文字を入れる様子



完成品を前に集合写真

高岩と人の暮らし

佐藤重廣（しげひろ）さんは、高岩で生まれ、高岩で生きてきた。穂積小学校・中学校に通った。家から5分ほどの距離だったので、寄り道をして楽しむことはなかった。それでも、「千曲川が近くに流れてたので、夏は河鹿（かじか）を獲って、焼いて食べたりした。あとは兵隊ごっこくらいかな。」家は農家で、ウサギ、ヤギ、ニワトリを飼っていたから、エサ取りの手伝いをしたという。「穂積小学校は1クラス30名ほどだったと思うけど、人数が足りないから、清水町の子供が何人も穂積小学校に通ってきた。」

「高岩の周辺には、穂積村役場、穂積農協、穂積小中学校、駐在所、酒屋、醤油屋、商店があったので、とても便利だった。穂積の中心地だった。」

「高岩駅があったので、3月の先生の転任の時、みんなで手を振って別れた。その当時は蒸気機関車で、ゆっくりと動き始めるので、長い間、手を振ってた覚えがある。」



イラスト 江村康子



佐藤博さん（手前）と菊原広宣さん



天狗岩と小海線

佐藤博（ひろし）さんは専業農家を営んでいる。31歳の時、会社員の仕事を辞め、高岩に戻ってきた。「会社員の仕事は嫌ではなかった。ただそれ以上に地元が好きで、地元で働ける仕事を探した。残念なことに、職種の幅が極端に狭かった。自分が理想だと考えてきた生活を実現するには、どんな仕事があるのかを真剣に考えた結果、農業を選んだ。『人に使われる仕事』ではなく、自立できる農業が自分の仕事だとわかった。」

13年前に菊の栽培から始め、その後ブロッコリーやかぼちゃの栽培まで広げた。5年前から、ようやく採算がとれるようになった。『ブロッコリーやかぼちゃの栽培を始めた理由は、売上期間を延ばそうと考えたから。自分が働いた分、見返りに売上高が上がる。しっかり目標を定め、達成する努力は怠らない。いつも自分が理想とする生活の実現を目指していることを忘れたことはない。そのためには、しっかりと考え、毎年の売上高をあげてきた。』

博さんのような専業農家が増えてくれば、この地域もより活気が出てくるなと期待をしたくなる。最後に博さんはこんな言葉で結んでくれた。

『人生は一度きり、考えながら生きることが、理想の生活を実現する道だと思う。』

篠原初男（はつお）さんは、団塊の世代である。子供の頃の話聞かせてくれた。「千曲川につり橋が架かってた。向こう側は本間（小海町）で、よく子ども同士で石の投げ合いをした。子どもだから石を投げて向こう岸までは届かない。そんな時、はやし言葉を言い合いながら投げ合った。『本間の学校へんな学校。裏に回ればつかい棒！。』『穂積の学校へんな学校。裏に回ればつかい棒！。』

「魚取りもよくやった。石の下に逃げ込んだハヤや河鹿（かじか）を両手で石を抱え込むようにして、石の下に手を差し込んで捕まえる。そんな捕まえ方を”さなぎどり”って私らは呼んでいた。」冬の思い出は、学校のストーブの焚き付けに使うカラマツの細い枝や松葉を束にして持って行った。割り当てがあって、一人3束とか5束を学校へ持って行った。だから山の下草は無くなっていて、山はきれいだったそうだ。

初男さんは、現在、マレットゴルフをやっている。12月から3月までは月2回マレットゴルフに出かける。それが健康維持の秘訣だという。

（文責 西村寛）

こぼれ話やその他記事等は公式noteにて公開中！

佐久穂 集落 note



発行・問合せ：佐久穂町役場 総合政策課 政策推進係

TEL.0267-86-2553 〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地

